

政治的自由主義と平和主義・序説－ジョン・ロールズと日本国憲法9条

麻 生 多 聞¹⁾

(キーワード：憲法9条，政治的リベラリズム，イマヌエル・カント，ジョン・ロールズ)

緒 論

長谷部恭男は「善き生に関する観念は多様であり，相互に比較不能」であるという「立憲主義の基本的前提」と，徹底的な非武装平和主義として9条を捉える9条論の関係について，「容易に整合しない」²⁾という立場を示しつつ，「国民の生命・財産をいかに実効的に確保するか」という価値と「平和主義は大切だ」という「価値の衝突」を踏まえるならば，「範囲と規模の限定された常備軍」の保持を認めるとする9条解釈論こそ，価値の多元主義を重視する立憲主義に適合的なものであると主張する³⁾。

価値の対立に関わる問題が公的領域に持ち込まれるべきではないというという長谷部の立憲主義概念は，価値の多元性を前提にした上で，その間の公平な共存を図るための手立てとするものであり，これはジョン・ロールズによる政治的自由主義と親和的な関係にあると思われる。

本稿は，ロールズによる政治的自由主義が，とりわけイマヌエル・カントとの関係においてどのようなものとして捉えられるべきかという観点から出発し，かような政治的自由主義が，社会の安定性や秩序形成を第一の目的とする静態的なものではなく，人民の主體的な政治的自律を求める動態的な過程を含むものとして位置づけられうること，そして公民的ヒューマニズムを拒否し，時として私的自律の価値を公共的政治的な自律より優位に置く場合もあるものの，それが政治的なものを排除したり，政治哲学の放棄を目指すものではないことを示すことを第一の課題として設定する。

その上で，そのようなものとしてロールズの政治的自由主義が把握されうるとするならば，長谷部による解釈とは対照的な憲法9条論（非武装平和主義として9条を解釈する憲法学において伝統的な平和主義学説）と，自由主義の接続可能性というものが生じるのではないかという問題提起を行うことが目指される。

1 カント道徳哲学の特色

「汝の意志の格率が，常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」という形で表される，イマヌエル・カントによる定言命法第2式は，主観的行為の格率を，普遍的道徳法則に一致して行為するよう必然的に命ずる命法である。この命法は，恣意や感情，特定の社会慣習や，宗教に左右されない普遍的な道徳原理の確立を目指す「近代的な」プロジェクトとして位置づけられる。

人間の生物学的構成により生じる自己中心的な目的をもつものとして自然法を構成し，合理的な利己心から導かれるものとして自然法を位置づけたトマス・ホッブズ⁴⁾によれば，自分の願望に照らして特定の行為規則を採用することが自分にとって合目的か否かが重要視されるが，このような立場については，「道徳的言明に固有の義務を課す力」を捉えることが困難であるという欠陥が指摘されることになる。このようなホッブズによる方向性は対照的に，カントは道徳的言明の認知内容を保証するため，実践理性概念をより発展させるという方向に進んだのであった⁵⁾。

カントにおける「道徳性の原理」は，純粹実践理性により「意志」⁶⁾を，行為の目的や実質としての経験的制約から独立なものとして，絶対的かつ客観的に規定するものである。カントは，意志に対する理性の命令を「命法」(Imperativ)として，これを「仮言命法」と「定言命法」に分類した。後者は行為を特定の目的との関係なしに，行為自体が客観的に必然的であると命令するものであり，後者こそが「道徳の命法」とされる。これは特定の行為を直接に命令するものであって，行為により達成される別の意図を条件とすることがあってはならない。カントは，理性により導かれる道徳は結果や個別の状況とは関係ないことを示し，ジョン・ステュワート・ミル

やジェレミー・ベンサムに代表される功利主義を批判した。そして、本稿が考察の主な対象とするジョン・ロールズも、カントによる強い影響の下で功利主義批判に取り組んだ、自由主義の代表的論者として位置づけられている。

2 カントにおける法・政治の概念

カントにおける法とは、ある個人の選択意志が、他者の選択意志と自由の普遍的法則に従って統合させられるための諸条件の総体である。カントによれば、正義に適う法は、ある種の社会契約から発生するものとされており、この契約は特殊な性質の契約である。これは理性の理念と呼ばれるものであって、例えば制憲会議に人民が集合して作り出される現実の契約ではない。なぜなら、制憲会議に集まる人々は異なる利益や価値観を持ち、さらに交渉能力や知識においても個人差が存在するため、そこにおける討議の結果として生じる法は、条件の違いを反映するものとならざるをえず、偏向的な内容となる可能性があるためである。現実の契約は、自律と相互性があれば正当化されるが、日常における契約では自律と相互性が実現しないこともある。自律の理想は参加者の交渉能力に差があれば実現しないし、相互性の理想も参加者の知識に差があれば実現しない。

さらに、同意の事実が義務の存在の十分条件とはいえない。現実の契約がどのように正当化されるのかという問題については、合意したという事実によってその正当性が保障されるわけではない。例えば、ある国家の制憲会議が奴隷制の存続を許容する憲法を制定したとして（実際このような憲法はありふれたものであるわけであるが）、合意された現実の契約としての性質をもつ制憲会議によるこの契約は、少なくとも近代立憲主義型の憲法典に平等規定を持つ現代先進国の人民からすれば、正義に適うものと考えすることは難しいであろう。

カントの法概念では、合法性を備えた自由の諸原理に基づく法的体制こそが法であり、政治とは現在あるがままの事態について法概念に適合した改革を義務（＝道徳）とするものである。カントにおいて政治と道徳は、法論（rechtslehre）を媒介として合致するものとして把握されるものであり、その結果、政治の格率は超越的な特性を備えたものとして捉えられることになる。勿論、実際の政治は経験的な原理に依拠して行われるところである。しかし、政治が法論の制限を受容した場合、政治はあらゆる技巧を避けて永遠平和という目的へと進むことが可能となる。政治と道徳は現実には乖離しているが、この双方に関わるものとしての法が、両者の接近を促進するものとして考えられるがゆえに、その一致が論じられることになる⁷⁾。法的体制の漸進的進化と人民の啓蒙のプロセスの関係からは、変容する体制との関わりの中で自由を行使する主体としての人民が反省的吟味を経て自ら変容し、所与の現実存在する人民としてカント的な理性的存在者へと接近してゆくというイメージ⁸⁾を看取することができよう。カントにおいて、究極的には、政治の格率は、格率に従うことから期待できる国家の繁栄や福利から出発するものであっては（換言するならば、経験的な原理からの出発であって）ならず、法義務の純粹概念から（純粹理性によりアプリアリに導出される当為から）出発しなければならないのである。

3 ロールズによるカントへの準拠

「自律性と相互性の理想が実現されることが保障される契約」の実現という課題に対し、ロールズは参加者が異なる状況に置かれずに全員が同一の状況にあり、力も知識も対等である場合の仮説的契約のみが、正義の原理について考える唯一の方法になると考えた。これが平等な状況を創出する「無知のヴェール」(the veil of ignorance)である。「無知のヴェール」の下では、自分が少数派になる可能性があり、あるいは貧困になる可能性があるため、平等な基本的自由を採用し、財を平等に分配することへの同意を調達することが可能となる。

このようなロールズは、現実の契約ではなく仮説的な社会契約によって正義の原理が導出されるという点においてカントに準拠するものであり、平等な原初状態を担保する「無知のヴェール」は、仮説的契約が機能するための条件といえることができる。カント的な自律観念に立脚したロールズの「公正としての正義」論は、共通価値が崩壊し多元的な善の価値の構想を持つ人々が等しく従う正義の原理を定式化しようとするものであった。価値が多様化した社会でもなお存在するであろう弱い規範的要求を特定し、それを条件とする正義の原理導出のための思考実験として、ロールズの原初状態という理論装置は捉えられる⁹⁾。

4 重合的合意論

以上のような『正義論』については、これが価値多元主義の恒久的事実を真剣に受け止めるものではなかったという反省から、ロールズにおいては従来のカント的立場は放棄されたとされる¹⁰⁾。包括的教説の多様性という現実の下で永続的かつ安定的な民主政体を維持するという目的のために、多様な包括的教説によって分断されながらも受容されうる「政治的なもの」を探索することこそが最重要課題とされ、そこではもはやカント的な包括的哲学の探索は放棄されたというのである。

「『正義論』は自身の原理が描く多元主義の状況を説明することに失敗している」¹¹⁾

「『正義論』における「公正としての正義」は、ひとつの教説であり、理性的な多元主義を所与として、かような正義論を、社会の基本構造に適用する政治的構想へと変形させることこそが、政治的自由主義の主題である」¹²⁾

『正義論』での議論においては正義をめぐる包括的な道徳的教説と政治的構想との区別が不十分であったと自己批判し、後者の議論に集中することを宣言した上のようなロールズの叙述は、自由主義を自己限定するものとして把握されることになる。そのような前提に基づくならば、ロールズのいう政治的自由主義とは、価値観の違いを超えて万人が共有すべきメタ価値観のごときものではなく、異なる価値を抱く人々が共存するための調整装置ということになる。自由主義自身が特定の価値に立脚する包括的教説になってしまえば、多元的価値の調停による重合的合意への到達は不可能となる。異なる教説の間の関係を、政治的に調整する役割に徹する自由主義という意味こそ、政治的自由主義の内容として充填されるべきものということになる。

1980年代以降のロールズは、①原初状態（original position）を構成する条件群をどのように特定するのか、②原初状態で導出された原理を、なぜ「私」が受容しなければならないのか、という2つの問題に取り組むことになった¹³⁾。ロールズは、この2つの問題に向き合い、原初状態なる仮説的思考実験の場と、原初状態においてではなく現実の価値多元主義社会に身を置く個人の判断を結びつけるものとして、「反照的均衡」(reflective equilibrium)を導入した。反照的均衡とは、原初状態における正義原理の合理的演繹と、原初状態に存在せず現実の価値多元社会に生きる個人の日常を接続しようと試みるものであり、「価値多元主義社会における共通価値の再興」という課題に対して、誰もが日常的な規範をめぐる営みからプロセスに参加できるという方法論を通じて応えようとするものであった。しかし、これについては、異なる個人間で収斂するための具体的基準に欠けるものであったがゆえに、特定の正義の原理を正当化するにはきわめて脆弱なものでしかないという批判も指摘された。

このような問題に対応するために、ロールズが用意したのが「重合的合意」(overlapping consensus)論、すなわち異なる価値観に基づく諸教説間に共通のモジュールがあるならば、それを拠点として皆が合意しうる協同のための正義の原理を構築することができるという議論であった。異なる善の構想の間で形成される正義の原理についての合意こそ「重合的合意」である。これは、市民の日常的な倫理実践に依拠するものであり、共通価値を再興するプロセスにおいて個人の内面を経過することにより、外的強制とは異なる内面的自律を確保することが可能になるという考え方である¹⁴⁾。

この重合的合意論は、多元的価値観の共存という条件の下で、多様で相容れない包括的教説を持つ者同士によって受容可能な「政治的なもの」が求められ、正義をめぐる政治的構想に関する「重合的合意」という観念に焦点を当てるものであるが、これに対しては、そのようなものであるがゆえに、問題は解決されるのではなく放置されることになり、政治哲学は終焉を強いられるのではないかという批判が提起されることになる。「重合的合意なるものはロールズが言うごとく自然に生じるようなものではなく、むしろ討議で実践された後に生じてくることの重要性が看過されている」としてロールズを批判したユルゲン・ハーバーマスによれば、ロールズによる重合的合意論においては、「正義構想の道徳的妥当性は、普遍的拘束力を持つ実践理性からではなく、道徳的構成要素について十分に重なり合う諸々の理性的世界像の幸運な一致から基礎づけられる」(強調は麻生)にすぎないものとなってしまう、結果的にカントの正義構想が帯びていた理性の要求が決定的に弱められてしまうことになる¹⁵⁾。

5 重合的合意の成立プロセス

それでは、ロールズにおいて、多元主義を前提とした正義の政治的構想をめぐる重合的合意は、どのようなプロセスを経て成立するのであろうか。ここではまず、「政治的構想を確証する人々はすべて、自身の包括的教義の範疇から出発し、そのような教義により提供される宗教的・哲学的・道徳的根拠に依拠する…かような根拠に基づき同一の政治的構想を確証しているという事実は、人々が確証する政治的構想が宗教的・哲学的・道徳的なものであるということの意味する」¹⁶⁾というロールズの叙述を参照することから考察を始めてみたい。

まずこの叙述からは、諸教義に内在する論理から正義の政治的構想が創出されるという立場を看取することが可能である。これはロールズにおける重合的合意の成立プロセスをめぐる解釈としての「内在説」と呼ばれる¹⁷⁾。このような内在説によれば、先述のハーバーマスによる指摘のごとく、正義の政治的構想は、「諸教義の重ね合わせにより、偶然もしくは幸運な出来事として創出されるもの」として捉えられることになるのであり、事実ロールズもそのように読むことのできる叙述を示している¹⁸⁾。ここでは、かかる正義の政治的構想についての重合的合意は、諸教義の共通な焦点として規定されているが、それでは正義の政治的構想と教義の関係はどのようなものとなっているのであろうか。これについては、両者の関係は対等なものとして捉えられてはならず、諸教義が政治的構想に優越し、当該構想を創出する役目を負うものとして位置づけられることになる¹⁹⁾。

しかし、ここで本稿は、「正義の政治的構想が、教義に対して上位に立つ可能性」がロールズにより示唆されているという板橋亮平の指摘²⁰⁾に注目してみたい。板橋は、「正義の政治的構想が教義に対して独立的であり、かつ優位な立場にあり、教義が正義の政治的構想を拒否することができず受容を迫られるようなケース」も、ロールズにより想定されていたとし（ロールズにおける重合的合意成立プロセスをめぐって、このようなケースを想定する解釈を「超越説」と呼ぶことができよう）、かような超越説をとりうる根拠として、「政治的なものを特別の領域とみなすことにより、その基本的価値を定立する政治的構想が「独立的」な見解であると述べることにしよう…我々の狙いは、主要な制度が重合的合意の支えを得ることができる形で政治的なものの特別な領域を特定化することである」²¹⁾、「正義の構想が政治的であるというときに私が意味していることは…この構想が何らかのより広範な包括的教義から独立して提示されるということである」²²⁾、というロールズの叙述を挙げながら、ロールズの重合的合意論が先述のような内在説をその内に含むものでありながらも、内在説はロールズの真意ではなく、ロールズの政治的自由主義が全体としては超越説をとるものであると主張する²³⁾。

超越説によれば、道徳的・哲学的なもののから超越した政治的なものが固有の存在として浮上し、確立された正義の政治的構想が教義に受容を迫り、場合によっては教義の論理の変更を迫るという意味において、構想は教義を「超越」するものと考えられる²⁴⁾。独立的でありながら、かつ自身がそのような構想を提示するという意味において、正義の政治的構想を超越的な規範として位置づける板橋は、かような構想が諸教義に対し優位に立ち、教義の側からの自律的な受容や変容をもたらしうるものであるとした上で、そのようなプロセスの結果として、諸教義が「まさに理性的なもの」へと昇華するという可能性を指摘する²⁵⁾。

「政治的」なるものの持つ超越的独立的性能に対するロールズの格別な拘り」は、超越的な政治的構想と日常的な熟慮された判断との往復運動として把握される反照的均衡を通じて、人民の熟慮がカント的道德原理との照合により政治的構想の発見へと至り、公共的理性の使用としてのかかる照合作業によって判断が重合するという構想を導出するものとして把握される²⁶⁾。すなわち、政治的構想の重合は、あくまで諸教義に対して優位な、カント的道德原理の働きによって創出されるものであり、諸教義の内在的働きにより構想されるものではないというのである。

ロールズの真の意図は、カント的道德に裏づけられた政治的構想の創出にこそあるのであり、これは、底流に潜むカント的な「自由かつ平等な道徳的人格」の原理（＝「自律的で道徳的な人格」）を基礎とした「道徳＝政治的」構想であると板橋は述べる。カントが個人を尊重する根拠はリバタリアニズムのように自己所有によるものではなく、人間が自律的かつ道徳的な存在たりうることにこそ求められるのであり、そうであるがゆえに人間には特別な尊厳が与えられるのであった。かような前提に基づき、生い立ちや特定の価値観、利益により規定される特殊な理性ではなく、普遍的な理性＝純粹実践理性による道徳法則に従うことが重要であると考えたカントは、定言命法に基づく自律的な行動をめぐる規範構築に努めたのである。

ここでは、偶発的な一致や、諸利益の偶然の一致としての「暫定協約」とは異なるものとして、偶発的重合とは異なるものとして位置づけられる重合的合意の立ち位置²⁷⁾が重要なものとなる。異なる教義を支持する人々の間での力の特的な分配に依拠することは許されるのではなく、何らかの独立した基礎に立脚するものでなければ

ばならない。この基礎とは、諸教義に対し優越的地位にあるカントの原理にほかならず、この優越性を欠けば単に諸教義の内在的論理により定立されることになり、安定化しない。無秩序な多元主義は、ロールズが意図する良く秩序化された社会を実現することには結実しない²⁸⁾。『政治的自由主義』では、『正義論』における「合理性」と交替する形で「安定性」の概念が登場し、「理性的なるもの」が、いかに永続的に「安定的に」実行可能なものとなるかに焦点が当てられている²⁹⁾。価値の多元主義を所与としたとしても、そこには調停する介在原理たる「道理的」原理、原初状態から社会的世界へと突き動かす特別な人格原理が必要不可欠とならざるを得ないというのである³⁰⁾。

重合的合意がなぜ合意しているかといえ、それは上位の「道德」が諸教義を教導するからに他ならない。とはいえ、重合的合意が超越的な道德の根拠により基礎づけられているということの意味は、正義の政治的構想が先験的かつ必然的に確立定位されるということではなく、普遍的なカント的道德原理への志向性をもつ、配慮された判断ないし確信に基礎づけられたコミュニケーションにより結果として政治的構想が創出され、重合的合意のもつ道德的超越性の存在が確証されるということと同義である。ここでは、諸教義の重合は、重合の外にある一致していない諸教義の多元性をも保持するものとされており、ロールズにおける上位概念としての「道德」が一元的で独善的でないことを意味している。カント的な「自由かつ平等な人格」の道德律は一元的に設定されるのではなく、一定範囲における諸教義の重合と、教義の重合外部分の多元主義を「事実」として受け止めようとするものである点に注意が喚起される³¹⁾。

6 考 察

さて、「ロールズの真の意図は、カント的道德に裏づけられた政治的構想の創出にこそあるのであり、これは、底流に潜むカント的な「自由かつ平等な道德的人格」の原理（＝「自律的で道理的な人格」）を基礎とした「道德＝政治的」構想である」とする板橋の立場について考察してみよう。『正義論』時代にカント的な「自己実現としての自律」に依拠していたロールズは、そのような自らの構想が、必ずしもすべての人民により同意されるとはかぎらない包括的教説のひとつと認めるに至り、カント的な自律的人格構想に依拠することにより正義の政治的構想を正当化することが多元主義的事実と適合しないと考えるに至ったものとして一般的に把握されている。「カント主義から決別し、彼の哲学的企てを、道德的試みではなく政治的試みとして鑄造し直し」、「自分の企てを、カントの包括的道德哲学から遠ざけ」³²⁾たというのが、通説におけるロールズの把握ということができるであろう。

しかし、このような通説に異を唱える板橋は、価値多元主義の事実を考慮に入れてなお、カント的構成主義の存在が重合的合意論を通じてより政治的構成主義を基礎づけていること³³⁾、正義を取り巻く環境は哲学的価値の多元化が存在し、それは所与として引き受けざるをえないとしても、正義の政治的基礎はやはりカント的道德的構想にあること³⁴⁾を主張する。ロールズの反省は「多元主義の事実を考慮に入れていなかったことに対するものであり、『正義論』以来のカント的構成主義がロールズの反省により実質的に修正されるとか、消去されるといった通説は誤りであるということになる³⁵⁾。

「価値の多元主義を所与としたとしても、そこには調停する介在原理たる「道理的」原理、原初状態から社会的世界へと突き動かす特別な人格原理が必要不可欠とならざるを得ない」こと、「普遍的なカント的道德原理への志向性をもつ、配慮された判断ないし確信に基礎づけられたコミュニケーションにより結果として政治的構想が創出され、重合的合意のもつ道德的超越性の存在が確証される」ことを強調する。つまり、「正当化の方法論として、反照的均衡よりも「重なり合う合意」や「公共的理由」が浮上してきた」³⁶⁾という一般的な後期ロールズ理解に異を唱え、あえて反照的均衡に重要な役割を担わしめようとしたロールズ理解を提示するものとして、板橋の議論を位置づけることができよう。

前節で触れたように、板橋によれば、あらゆる哲学的、道德的教義から超越したものとして正義の政治的構想は規定され、諸教説の重なり合いにより定立される重合的合意は諸教説のもつ内在的論理の束（妥協）の結果としての存在では決してなく、超越的な正義の政治的構想（カント的道德的構想でもある）が諸教説にその受容や変容を迫り、自ら理性的になることにより諸教説間の分断構造が変化をきたし、「政治的な」領域へと牽引されて重合が生まれる³⁷⁾。超越的な政治的構想と日常的な熟慮された判断との往復運動による反照的均衡の存在の重要性は依然として顕著であり、カント的な道德的構想により媒介された我々の熟慮の結果政治的構想が発見され、かかる照合作業（公的理性の使用）による判断が重合するということになる。

ただし、カントのように叡智界に生きる理性的存在者のみを前提とすることは「政治的」構想の範疇外であり、理性的存在と合理的存在、超越的存在と経験的前提が相結ばれてこそ、人格的存在は政治的（社会的）となる。「理性性は合理性に対して優先性をもち、絶対的にそれを優先させる。つまり公正としての正義は、かかる性能をもつという点でカントの見解と似ているのである」（強調は麻生）³⁸⁾というロールズの表現は、板橋によれば、カントにおいては超越的理念としての理性性のみが想定されており、ロールズが設定する「理性性（上位道徳）と社会的協働（政治的経験的事実）とのセット」と完全に一致するものではないために用いられたものということになる。ここから板橋は、ロールズがカントを捨てたのではなく、むしろカント的な道徳（理性性）を政治的に活かすために、政治的経験的事実としての「社会的協働」を取り込んだことを強調し、「理性性（カント）が合理性（教義・善）に対して優位に立ち、後者を前者が牽引」するがゆえに、諸教義（善）の重合が可能になるというのである³⁹⁾。カント的な理性性は政治の領域（重合）を創出し、暫定協約ならぬ合意を確保する基礎として位置づけられ、カント的道徳が政治的なものの底流において重厚にその存在を主張している。ロールズは政治的正義論を展開するものの、哲学的基礎づけを放棄してはおらず、カント的な道徳哲学的構想により基礎づけられるものとして政治的自由主義が完結すると断ずるのである⁴⁰⁾。

このように、政治的リベラリズムのロールズがカント的人格構想を放棄していないという側面は、板橋以外の研究者によっても指摘されている。カント的な「自由で平等な理性的存在」という人格構想が、「それを支持する理由は各々の包括的世界観において異なるにせよ、我々の公共的な文化において広く共有されている」がゆえに、このカント的人格観念に訴える権利が我々には付与されている、とするペインズ⁴¹⁾を引用し、「道徳的人格とは、カント的な自律概念を体現した道徳的主体というよりも、「自由で平等な人格としての市民」であり、この人格構想は道徳的理念ではなく政治的構想の一部として規定されている」⁴²⁾と述べる福岡聡によれば、ロールズがカント的な人格構想を放棄したのではなく、その正当化の仕方を変えたということになる。「正義原理が正当化されるのは、それらが原初状態においてカント的な人格構想を体現する契約当事者によって選択され、さらに我々の熟考された道徳的判断と反照的均衡の状態にあるからではない。かような諸原理が我々の公共的文化に根付いており、民主社会の構成員である我々の基礎的な直観によっても支持されている人格構想を体現した当事者達が選択しうる諸原理と考えられ、そしてかような諸原理は他の諸原理よりも我々の民主社会において「安定性」を保持しうるという政治的考慮から正当化される」⁴³⁾と述べる。多元性の事実を踏まえても、自由で平等な道徳的人格という構想がいかなる包括的教説からも支持されうるという「公共的な理由」から、この人格構想と適合しているか否かが正義の構想の最終的な正当化基準になるというのである。

神原和宏も、ロールズの政治的リベラリズムについて、社会の安定性や秩序形成を第一の目的とする静態的なものではなく、人民の主體的な政治的自律を求める動態的な過程を含むものとして位置づけ、たしかに公民的ヒューマニズムを拒否するロールズは、時として私的自律の価値を公共的政治的な自律より優位に置場合もあるものの、それが政治的なものを排除したり政治哲学の放棄を目指すものではないという指摘を示している⁴⁴⁾。神原は、ロールズとハーバーマスの論争について、「大山鳴動して」不発に終わっているという指摘⁴⁵⁾を参照しつつ、ロールズはハーバーマスと同様に公的自律と私的自律の同根源性や内的関連性を認め、また人民についてもあらゆる場面で政治的自律を発揮することができ、人民の憲法的意志の優位を認め、その意味でリベラリズムに対する民主主義原理の優位性を承認するものとしてのロールズ像を浮かび上がらせている⁴⁶⁾。

ロールズはたしかに私的自律を重視し、カントとまったく同じ方向性における道徳的自律を人民が持つとは考えないが、ハーバーマスが批判するように「人民の公共的自律性」が不十分なものになってしまうという問題については、「多様な政治制度や政治的実践の観点から特定されたり、あるいは立憲政治を営むに際しての思想や行為の中にある政治的美徳によって表されるところの政治的自律」⁴⁷⁾性を帯びるものとしての人民により、政治的原理や社会政策につき討議されることが当然期待されているとする。

本稿が先に触れた板野の指摘によれば、「超越的理念としての理性性のみが想定されているカント」とロールズが異なるのは、ロールズにより選択された「理性性（上位道徳）と社会的協働（政治的経験的事実）とのセット」という方法論ゆえであり、この点をロールズが自ら認識していたがゆえに、「理性性は合理性に対して優先性をもち、絶対的にそれを優先させる。つまり公正としての正義は、かかる性能をもつという点でカントの見解と（同一なものではなく）似ている」という表現がロールズにより用いられたというのであった。

以上のようなものとしてロールズの政治的自由主義が把握されうるとするならば、本稿が冒頭で引用した長谷部による解釈とは対照的な憲法9条論、すなわち、長谷部による立憲主義学説が登場する以前の憲法学において支配的であった、徹底的な非武装平和主義として9条を解釈する平和主義学説と、政治的自由主義の接続可能性

というものが生じるのではないか。このような問題提起を行うことをもって、本稿の課題は果たされたことになる。本稿は「政治的自由主義と平和主義・序説」としての位置づけをもつが、今後の研究において筆者が取り組む課題は、「政治的自由主義と非武装平和主義憲法の接続可能性」の内実について詳細に検討するというものとなる。具体的にいえば、カント的人格構想を放棄していないどころか、むしろカント的道德に裏づけられた政治的構想の創出を求めているとされたロールズにおいて、カント的な「自由かつ平等な道徳的人格」の原理（＝「自律的で道徳的な人格」）がどのように機能するものとして把握されるべきなのか、ということである。価値多元主義の事実を考慮に入れてなお、カント的構成主義の存在が重合的合意論を通じてより政治的構成主義を基礎づけている、とする板橋をはじめとするロールズ研究の成果については、とりわけ「カント的構成主義の存在が重合的合意論を通じて政治的構成主義をどのように基礎づけるのか」がさらに詳細に検証されなければならないように思われる。

政治的自由主義の樹立に際し、究極的には相容れることのない多元的な教義が対立する社会を前提としながらも、そこにはなんらかの端緒、出発点が求められなければならない。ロールズは超越的な道徳原理に依拠することなく分配の正義を演繹するいわば自然法抜きの契約論を提示せんとしながらも、原初状態の当事者は少なくとも平等で自由なカント的人格を帯びるものとされており、その意味では平等で自由という自然法を読み込んでいとも解される。この条件は自然法的＝超越的なのか⁴⁸⁾。板橋は、公共的基礎を担うカント的な構想が共有化されているという「基本的直観」が政治的構想の根本に据えられている⁴⁹⁾、という表現を用いている。このあたりの意味について拘りながら、政治的自由主義と非武装平和主義憲法の接続可能性というものについて研究を進めていきたいと考えている。

注

- 1) 鳴門教育大学社会系教育コース
- 2) 長谷部恭男『憲法と平和を問いなおす』ちくま書房、2004、166頁。
- 3) 長谷部恭男・杉田敦『これが憲法だ！』朝日新書、2006、72頁。
- 4) J. W. N. Watkins, *Hobbes's System of Ideas*, Hutchinson University Library, p.140, 1973
- 5) 神原和宏「政治的リベラリズムとカント的共和主義の対話－ロールズ政治哲学の課題」社会と倫理19号、2006、34頁。
- 6) 実践理性としての意志（Wille）と経験的意思（Willkur）の相違は、カント道徳哲学においてきわめて重要である。
- 7) 齊藤拓也「カントにおける政治の位相と啓蒙－体制変革の方法と批判的自由」相関社会科学16号、2006、37頁。
- 8) 同上、45頁。
- 9) 伊藤恭彦『多元的世界の政治哲学－ジョン・ロールズと政治哲学の現代的復権』有斐閣、2002、160頁。
- 10) K. Kukathas, P. Pettit, *Rawls: A Theory of Justice and its Crisis*, Stanford Univ. Press, 1990, p.139.
- 11) J. Rawls, "The Idea of an Overlapping Consensus", F. Samuel eds., *Collected Papers*, Harvard Univ. Press, 1989, p.49.
- 12) J. Rawls, "Introduction to the Paperback Edition", *Political Liberalism*, Columbia Univ. Press, 1996, xliii.
- 13) 伊藤、前掲註9、173頁。
- 14) 板橋亮平「ジョン・ロールズにおける「重合的合意」概念の検討：政治におけるカント的道德の存在」年報筑波社会学16号、2004、174頁。
- 15) J. Habermas, *Die Einbeziehung des Anderen*, Suhrkamp, Verlag, 1996, p.101－104.
- 16) J. Rawls, *Political Liberalism*, Columbia Univ. Press, 1993, p.147－148.
- 17) 板橋、前掲註14、91頁。
- 18) J. Rawls, *supra* note14, p.148.
- 19) 板橋、前掲註14、174頁。
- 20) 同上、92頁。
- 21) J. Rawls, "The Domain of the Political and Overlapping Consensus", F. Samuel eds., *Collected Pa-*

- pers*, Harvard Univ. Press, 1989, p. 482–483.
- 22) J. Rawls, *supra* note16, p. 223.
- 23) 板橋, 前掲註14, 93頁.
- 24) 同上, 92頁.
- 25) 同上.
- 26) 同上, 93頁.
- 27) J. Rawls, *Justice as Fairness: A Restatement*, Harvard Univ. Press, 2001, p. 192–195.
- 28) 板橋亮平「カント的構成主義から政治的構成主義へ」社会学研究77号, 2005, 110–111頁.
- 29) 朝倉輝一「公共的理性使用をめぐるハーバーマスとロールズの対話」沖縄大学人文学部紀要12号, 2010, 36頁.
- 30) 板橋, 前掲註14, 110頁.
- 31) 同上, 96頁.
- 32) 神原, 前掲註5, 20頁.
- 33) 板橋, 前掲註28, 108頁.
- 34) 同上, 107頁.
- 35) 同上, 108頁.
- 36) 福岡聡『ロールズのカント的構成主義－理由の倫理学』勁草書房, 2007, 42頁.
- 37) 板橋, 前掲註28, 109頁.
- 38) J. Rawls, *Justice as Fairness: A Restatement*, Harvard Univ. Press, 2001, p. 82.
- 39) 板橋, 前掲註28, 98頁.
- 40) 同上.
- 41) K. Baynes, *The normative grounds of social criticism: Kant, Rawls, and Habermas*, Suny Press, 1992, p. 75.
- 42) 福岡, 前掲註36, 41頁.
- 43) 同上, 41頁.
- 44) 神原, 前掲註5, 39頁.
- 45) 川本隆史『ロールズ』講談社, 1997, 238頁.
- 46) 同上, 31頁.
- 47) J. Rawls, *supra* note16, p. 400.
- 48) 朝倉輝一「公共的理性使用をめぐるハーバーマスとロールズの対話」沖縄大学人文学部紀要12号, 2010, 46頁.
- 49) 板橋, 前掲註28, 111頁.

Political Liberalism by John Rawls and the article9 of the Constitution of Japan.

ASO Tamon

This Paper starts consideration from a viewpoint how the political liberalism by John Rawls should be interpreted in a relation with Imanuel Kant. I try to show first that such the political liberalism should be interpreted not as to sets neither social stability nor social order as the first purpose, but contains dynamic process in which the people's active political autonomy is searched for. And I try to show that although it refuse civic humanism and sometimes private autonomous values may be put on predominance from public political autonomy, it does not eliminate a political questions or does not aim at abandonment of political philosophy.

And this paper try to show that If the political liberalism by Rawls may be interpreted as such, such argument by Rawls can be connected with the argument that the article9of the Constitution of Japan should be interpreted as to abandon all military powers and all wars include war for self-defense.